

# 近代の経済学者佐々木多門と イギリス高級紙The Timesに関する考察

丹藤 永也<sup>※</sup>      佐々木紀人<sup>※※</sup>

## 1 はじめに

本稿の目的は、青森県平内町出身の経済学者である佐々木多門が、晩年イギリスの高級紙The Timesに東京通信員として論文を寄稿していたという佐々木（2013）の主張について、佐々木の資料及び分析の精査と新たに発見した2つの資料の分析をもとに検証することである。

佐々木（2013）は多くの資料をもとに多門の人生を詳細に紐解き、これまで明らかにされなかった多門の業績を世に知らしめた。そして多門の最大の業績として、The Times東京通信員としての活躍を挙げている。

これまで我が国では、戦前に日本人が外国の新聞や雑誌に発表した英文記事を発掘し考察するという研究がなされてこなかった。それは、当時日本人が外国の主要メディアに英語で書いた記事を寄稿するということは想像できないことであり、実際にその事実はほとんどなかったからである。よって、戦前多門がThe Timesに英語の論文を寄稿していたということを明らかにした佐々木（2013）の研究は、当時の日本の国内の状況や日本の世界的な立場について英語で発信した日本人の存在を発掘した点において非常に貴重であると言える。そして、本稿において多門がThe Timesの東京通信員であるという事実を証明することは、当時一人の日本人がジャーナリストとして世界に認められたことを明らかにすることであり、これは日本のジャーナリズムの歴史の中で偉大な業績であると言える。

しかしながら、佐々木（2013）の「多門はThe Timesの東京通信員であった」という主張にはさ

らなる議論と検証が必要である。なぜなら、多門がThe Timesの東京通信員であったという直接的証拠がこれまで見つかっていないからである。

この直接的証拠とは、The Times本紙に佐々木多門という氏名が記載されていること、あるいは多門が東京通信員として寄稿したことを証明するThe Times本社や東京支社の記録を指す。

こうした直接的証拠がない中で佐々木（2013）は4本<sup>1)</sup>の文献を示し、それらに記述されている内容とその記事の執筆者とされる肩書から多門がThe Timesの東京通信員として論文を寄稿していたと結論付けている。確かにこれらの文献には多門がThe Timesに論文を寄稿していたという記述はある。しかし、多門がThe Timesの東京通信員として論文を書いていたと記したものは1つもない。つまり、佐々木の結論はあくまでも間接的な証拠の積み重ねによる推論に過ぎないということである。

そこで、本研究は、佐々木（2013）が示した資料の再調査を行い、その信頼性について検証するとともに、新たに発見した2つの資料の分析・考察を行い、佐々木の資料と併せて総合的に議論することによって、多門が東京通信員という立場で論文を寄稿していたという佐々木の仮説を検証する。

## 2 The Times東京通信員たる資質

### 2.1 高級紙The Times

ここではまず、当時のThe Timesとはどのような新聞であったかを確認する。

※ 青森公立大学講師  
※※外ヶ浜町立蟹田中学校教諭

The Timesは、1785年にイギリスで創刊された世界最古の日刊新聞で、戦前はまぎれもなく世界の言論界をリードした高級紙だった。高級紙という定義については、1962年に英国の新聞に関する王立委員会が、「この新聞の発行者は、公の問題につき広い範囲にわたって、十分な情報を要求し、時間をかけて読む用意のある読者に対して奉仕することを目的とする」と発表し、センセーショナルな事件報道やゴシップ報道に力を入れる大衆紙とは明確に区別した。

そしてThe Timesは、「ジャーナリズムの質、最新技術の導入度や発行部数の多さ、政治への影響力で群を抜いていた」<sup>2)</sup>ことから世界一の新聞と目された。さらに、一国の政策決定にまで及ぶその影響力から、19世紀は『タイムズ』の時代<sup>3)</sup>だったとまで言われた。それ故に、アメリカのリンカーン大統領をして「タイムスは世界において最も強力な存在である」<sup>4)</sup>と言わしめるほどの存在感を誇示していたのである。

20世紀に入るとThe Timesは、イギリスの衰退とアメリカの隆盛に伴ってその絶対的地位からは陥落するが、依然としてアメリカのThe New York Timesとともに世界メディアの二大勢力を形成するのである。

## 2.2 検証の3つの観点～英語力、国際性、政治・経済の専門性

多門がThe Timesの東京通信員としての資質を兼ね備えていたかどうかを検証するために、3つの観点を設定する。2.1で述べたように、The Timesは高級紙として当時の貴族や知識人を読者にもち、多方面に大きな影響力を保持していた。当然、掲載される記事は内容の信頼性ばかりでなく、格調高い文体に至るまでThe Timesの看板に見合うものでなければならない。

そこで、本稿では次の3つの観点をThe Times東京通信員に求められる資質と設定し、多門の実力がそれに見合うかどうかを検証する。1つめは英語力である。この場合の英語力は単に会話ができる、英文を書くことができるというレベルではなく、教養あるイギリス人を始めとする世界中の上流階級や知識人に違和感なく英語を読ませることができるネイティブの記者と遜

色ないレベルの英語力ということである。2つめは国際性である。The Timesはイギリスのみならず世界各国で読まれていた。よってその執筆者は、イギリス国民、さらには世界中の読者を意識した鋭い国際感覚をもって記事を書くことが求められたであろう。3つめは政治・経済に対する専門性である。The Timesの読者は、政治家、官僚、実業家といった知識人である。よって執筆者には、そうした知識人をも納得させられるだけの政治・経済に対する深い専門性が求められたものと考えられる。

## 2.3 多門の英語力

まず、1つめの英語力について検証する。当然のことではあるが、何よりも求められるのは英語のライティング能力である。執筆者は高級紙The Timesの名に恥じぬ格調高い英文を書く能力を求められたに違いない。例えば、石井(1940)はThe Timesに掲げられる論文の水準について「是等の論文はもはやジャーナリズムの域を脱して文学の域に踏み込み、ベーコンやモンテナスにまで肉薄してゐる、と言っても過言ではあるまい。かうした理由からであらう、廣く知識階級の読者層に歓迎され」<sup>5)</sup>していると、「ただ遺憾なのは筆者の名が記されていないことである」<sup>6)</sup>と、その匿名性に触れている。

多門の英語力については、数多くの文献がその実力を証明しているが、ここでは多門のライティング能力が顕著に表れ、世界からも高く評価された『The Recent Economic Development of Japan』を一例として取り上げる。この書籍は1915年(大正4年)に日本銀行から出版されているが、当時の桂太郎首相が、諸外国の日本経済に対する不透明感を取り除き、さらにはその未来に対して有利な判断を下させることを目的として日本銀行に編纂を指示した<sup>7)</sup>ものである。多門がプロジェクト・リーダーとして英文執筆を担当した本書は、完成までに7年以上の歳月を要し、全14章、431ページ、別冊で20の図表と5つの地図が付属した大作となった。後に、日本銀行文書局長と朝鮮銀行副総裁を歴任した君島一郎は、多門のこうした活躍を「調査局で英文関係の文献担当のほうの総大将」<sup>8)</sup>と評した。当時

の日本銀行には英語といえば多門という空気が流れていたという。そして、この本は出版されるやたちまち国の内外で好評を博した。例えば、日本銀行副総裁を務めた水町袈裟六は「田中、佐々木の諸君が奮励努力せられて大正4年遂に『The Recent Economic Development of Japan』と題する見事な英文編纂物が出来上がった」、「其価は之を一読すれば直ちに認むることを得べく他の類似の書とは到底同日に論ずることを許さぬものである。印刷成るや直に財務官を経、或は監督役直接に目指す向々へこれを配送せられたるが各方面共頗る好評」<sup>9)</sup>と絶賛している。また外国紙のThe Timesでさえ、1916年(大正5年)2月18日の“Japanese Economic Progress”と題する記事で「最も実用的かつ百科事典のような書籍」、「大戦後の景気拡大に向けた一分野として日本に益々関心を高めている全てのビジネス関係者、並びにその他諸氏にとって極めて貴重な書」、「大戦前の十年間における日本の外国貿易の成長をいまだ十分に認識していない人々は、同書に収められたこれらの表の数値を十分に検討するべきである」<sup>10)</sup>と高く評価している。同書に対する内外のこのような高い評価から、多門のライティング能力と経済に対する見識の高さを推察するのは容易なことである。

また、もう一例として、青山学院教授の櫻井成明の多門に対する評を挙げる。櫻井は多門の日本銀行における英語関係の役割の1つとして、「英米の客人供応のため能楽を演技せしむ時には、予め君に囑してその演能の筋書き、また主要なる問答等英訳印刷して、客人たちに配付するを例とした」<sup>11)</sup>と記している。確かに、当時の調査局の翻訳物には謡曲「紅葉狩」や狂言「末広がり」が含まれている<sup>12)</sup>ので、これらは多門が英訳したものであると考えることができる。古典文学を外国人にも通じるように英訳するには、彼我の文化に対する深い造詣と古典の妙を伝えられるだけの極めて高いライティング能力を求められるが、多門はそれを有していたものと考えられる。

## 2.4 多門の国際性

次に、多門の国際性を検証する。The Timesの執筆にあたっては、イギリスの国内事情に精通し

ていることはもちろん、その読者が世界中にいることを勘案し、世界情勢や世界経済の動向を踏まえながら、読者にとって日本の有力な情報源となり得る記事を提供しなければならない。

多門は少年時代、英領カナダ時代のカナダ・メソジスト教会が運営する東洋英和学校に学んでいる。この学校で英国に対する憧憬と尊敬の念を抱くに至った多門は、懸命に英語を学び、英国マナーを身に付け、The Timesを愛読するようになった<sup>13)</sup>。そしていつしか誰もが認める英国通となったのである。『日本銀行職場百年 上巻』は、大正時代に調査局で活躍した「異色の人材」として多門の名を挙げ、「談論風発、英国の金融・経済ばかりでなく、政治・外交にも一見識をもって」<sup>14)</sup>いると記している。君島は「この人は、タイムズを本当によく読んでいて、英国の政治、外交に関する議論は相当なもので、教えられるところがあった」、「こと英語関係となると色々なことを知っていた。殊にイギリスのことについては、経済界のことよりも政治向き殊に外交面のことに興味を持っていた」<sup>15)</sup>と述べている。これらの記録から、多門が高い国際性を身に付けていたということは明らかである。

また、世界情勢や世界経済に対する見識は、多門が日本銀行で置かれた部署や役職から判断できる。多門は1904年(明治37年)10月、当時日本銀行副総裁であった高橋是清の半ば強引な招きにより特別入行するが、この時2つの大きな役目を負わされている。1つが国内外の経済事情を調査研究することであり、もう1つがロンドンとニューヨークにある海外代理店を管轄することであった。多門は毎日外国から届く電信に対応するとともに、現地から送られてくる調査報告書をもとに日本銀行に欧米の新しい知識を導入する役割を担っていたのだ<sup>16)</sup>。このように日本銀行において各国から集まる情報を最も早く知り得る立場にいた多門が、世界情勢や世界経済に対する深い見識を有していたと考えることは容易である。

## 2.5 多門の政治・経済に対する専門性

最後に政治・経済の面から多門を考察する。まず経済に関してだが、多門は間違いなく一流

の経済学者であった。1901年（明治34年）、世界的に名の知れた経済学者であり第6代アメリカ経済学会会長を務めた、当時ウィスコンシン大学教頭のリチャード・イーリーは、自身の著した『A Decade of Economic Theory』という冊子が完成すると、これを直ちに多門に送ってその翻訳を懇望している<sup>17)</sup>。多門はその求めに応じて邦題『最近十年に於ける経済学説』という翻訳書を出版しているが、これは当時としては珍しいアメリカの経済学を日本に紹介した本として注目された。さらに1907年（明治40年）には、日本で初めて経済学の来歴を体系的にまとめた書籍と言われる『経済学派比較評論』を出版した。経済学が専門の京都大学の間宮陽介名誉教授は、この書に対して「おそらく本書は近代経済学を日本に紹介した先駆的書物である。明治期において、メンガー、ワルラス、ジェヴォンズ、バームーバヴェルク、ウィーザーらの近代経済学に触れている例を、私は知らない」、「もし誰かが、日本における経済学の歴史を書くなれば、本書は絶対に触れなければならない書物となること、間違いない」<sup>18)</sup>という書評を寄せている。以上のことから、多門が極めて先駆的で深い専門性を備えた経済学者であったとすることができるだろう。

次に、政治面に関して考察する。佐々木（2013）によると、多門は二人の大家政治家の私設顧問を務めている。一人は内務・鉄道・通信大臣を歴任し、政友本党の党首も務めた床次竹二郎である。多門は床次が内務次官の1911年（明治44年）に私設顧問に就任したが、二人が頻繁に意見交換する姿が伝えられている<sup>19)</sup>。もう一人の政治家は高橋是清である。前述の通り、高橋は多門を日本銀行に特別入行させるほど多門の能力を高く評価していた。高橋と多門が親密な関係にあったことは、2012年（平成24年）にその存在が公になった多門宛ての3通の高橋是清書簡<sup>20)</sup>や「高橋是清日記」<sup>21)</sup>が明らかにしている。

そして、1918年（大正7年）に日本初の政党内閣と言われる原内閣が成立した際、「内務大臣は政府の中心、大蔵大臣は政策の中心」<sup>22)</sup>と言われた当時あって、多門は床次内相と高橋蔵相という両大臣の私設顧問を同時に務めていたこ

とになり、これは多門が政治にも精通していたということを証明するのに十分な事実である。

以上のように、英語力、国際性、政治・経済の3つの観点から多門の資質について議論してきたが、いずれの観点からも多門がThe Timesの通信員たる資質を有していたと判断できるものと考ええる。

### 3 The Times東京通信員であることを裏付ける資料の発掘

#### 3.1 東京通信員としての肩書

前述のように、当時のThe Timesの東京通信には記事の執筆者の氏名はないが、肩書は記載されていた。ここでは佐々木（2013）をもとにこの肩書について再検討する。

佐々木（2013）の調査によって、当時の東京通信では主に2つの肩書が使用されていたことが判明している。1つが「Our Own Correspondent」で、もう1つが「Our Tokyo Correspondent」である。当時の外務省情報部が発行した『外国に於ける新聞 下巻（支那以外の諸外国之部）』では、The Timesを含む当時のイギリス新聞界の特徴として、「海外通信の冒頭には“Our Own Correspondent”と記載してあるものと単に“Our Correspondent”と書いてあるものの二種がある。前者は当該新聞社員たる特派員即ちstuff correspondentを指し、後者は社員ならざる通信員を意味するものである」<sup>23)</sup>と説明している。つまり、これをThe Timesの東京通信に当てはめて考えると、「Our Own Correspondent」がThe Times本社の「新聞社員たる特派員」であり、「Our Tokyo Correspondent」が「社員ならざる通信員」、つまり多門だと推定できる。

佐々木（2013）が示した1932年（昭和7年）5月の「満州の前途・日本の未来図」、8月の「満州国・荒野の任務・日本擁護論」、9月の「日本版モンロー主義・アジア外交・ルーズベルト大統領の提案を伝える」、10月の「日本主義・国家主義者の夢想」、12月の「日本の見解・満州国における重大な主張・忍耐を請願」（以上の記事タイトルの訳はいずれも著者による）などの



日本に関する一連の論文<sup>24)</sup>には、すべて「Our Tokyo Correspondent」の肩書があり、多門が「Our Tokyo Correspondent」であるという佐々木の主張はかなり信頼性があるものと判断できる。

さらに、本稿では、新たにこれらの記事の中に筆者の特定へとつながる可能性のある表現を発見した。それは上述の12月1日に発表された「日本の見解・満州国における重大な主張・忍耐を請願」<sup>25)</sup>の中にある次の表現である。

Without pretending to assess the merits of the case for the former course - too presumptuous a task for a resident of Tokyo - the writer proposes to present some reasons for the exercise of patience.

本稿では、この中にある「too presumptuous a task for a resident of Tokyo」という表現に注目した。これを直訳すれば「東京住民としておこがましいかもしれないが」となる。仮に、「a resident of Tokyo」を一般的に「東京の住民」と解釈したとすると、そこには東京に住む外国人も含まれてしまうため執筆者の特定にはつながらない。しかし、英字新聞における首都の名称は地名としてだけでなく、その国の「政府」の意味でも使われ、首都は政府の代名詞となる。つまり、「Tokyo」は地名としての「東京」という意味のほかに「日本国政府」の意味でも使われるということである。Washingtonなら「米政府」、Beijingなら「中国政府」を示すことになり、この解釈でいくと、「a resident of Tokyo」には「日本政府が存在する東京に居住するひとり」、「日本政府の立場を支持する立場の日本人のひとり」というニュアンスが生まれ、この論文は日本人によって書かれたものである可能性が高いと考える。

### 3.2 佐々木 (2013) が示した文献の精査

本研究の一番の困難点は、多門が論文を執筆していたと考えられる時期のThe Times紙面に多門の名前が見られないばかりでなく、The Times本社や東京支社に記録すら残っていないということである。当時のThe Timesは、軍部や国家主義者からの迫害を恐れ、紙面や本国との通信記録に名前を残していない<sup>26)</sup>ことがその理由である。佐々木 (2013) は、The Times本社に多門の記録が残っていないか問い合わせ<sup>27)</sup>をしているが、アーキビストからの返答は、①タモン・ササキの記録は残っていない、②東京支局が独自に執筆を依頼したと考えられる、③当時の不安定な社会状況下では東京と本社の通信記録に通信員の名前は絶対残さない、というものだった。また、東京支社からも有力な情報は得られなかった。

このような状況の中で、佐々木 (2013) は以下に挙げる4つの資料を発掘しその分析を試みている。ここではそれらの資料に対してより詳細な検証を試みる。

1つめは、多門が甥の佐々木高精に宛てた手紙である。多門は亡くなる直前の1937年(昭和12年)11月、高精に宛てて手紙を書いている。その中で多門は「身体処々疼痛続き、手足とも一層不自由にてタイムス論文も執筆不可能で中止」<sup>28)</sup>と綴り、身体の不調からThe Times寄稿を中止した旨を吐露している。唯一、多門自身がThe Timesについて触れたこの手紙の文脈からは、多門が晩年身体の不自由をおしてなお継続的に論文を執筆していたことを読み取ることができる。多門はThe Timesの論文執筆に強い矜持をもって取り組んでいた<sup>29)</sup>とされているが、この手紙はそれを裏付ける貴重な資料と言える。

三越製

61

高 棅 跋

579



2つめは、『日本メソジスト時報』に掲載された鳥居坂教会牧師で青山学院非常勤講師でもあった倉長巍が多門の告別式で読んだ弔辞「佐々木多門氏を悼む」<sup>30)</sup>についての記事である。前述の高精に宛てた手紙を書いたからおよそ2週間後の12月3日、多門は自宅で亡くなり、同5日には阿佐ヶ谷教会で告別式が執り行われている。その際、倉長は弔辞で「(多門は)数々『ロンドン・タイムス』に論文を寄稿して大に徳とせられ、隠れた英文学者であった」と読み、多門と

The Timesの関係について触れている。多門は国際社会における日本の立場を堂々と主張して関係者に大に感謝された<sup>31)</sup>とされるが、「ありがたいもの、感謝すべきもの」と考えること」という意味の「徳とせられ」という表現からもこのことが推察される。また「隠れた英文学者」という表現は、The Timesに論文を寄稿するという行為が匿名で行われ、あまり公の性質を有していなかったことを示していると考えられる。

資料2 倉永巍 (1938) 「佐々木多門氏を悼む」『日本メソジスト時報』

(三) 日四十月一年三十和國 報時トスヂソメ本日 版八十七百三千二第 (可報特使郵三第)

### 佐々木多門氏を悼む

左は去る五日午後阿佐ヶ谷教会に於て執行せられた  
故佐々木氏告別式弔辞の概略である。

倉 長 巍

佐々木多門氏は慶應二年二月青森  
縣下的小湊に風々の聲をあげらる。  
小學校に通ふ頃から神童のほまれが  
あられた。地方の中學校を卒業して  
後上京、明治十八年の交、麻布の東  
洋英和學校に入學された。明治十七  
年十一月此の學校が開設された時は  
生徒僅かに十二人。翌年六月には登  
百八拾名に増加し、越えて十九年に  
は殆んど四百名に達した頃であつた  
その頃有名なカウラン博士を是れ  
めとして、ホキチングトンや、サン  
ビー教授等が居られた。要路の官更  
有名な實業家、顯門の子弟たちが積  
々として入學した。即ち其後社會の  
要路に立てる幾多知名の人士等の一  
時觀ふて來學したのは其頃であつた  
君は明治二十一年六月、帝國大學  
法科預科に入學せられた。同二十四  
年修業を以て卒業、翌二十五年の  
秋京都同志社普通學校及び政経學校  
の教師となられた。二十七年奈良縣中  
學校に轉任、其の頃夫人を迎へられ  
た。更に三十年より同三十七年迄備  
後第二高等中學校の教授となられた。  
而して三十七年より昭和元年まで日  
本銀行調査局に勤務せられた。同行  
勤務中即四十一年の交、當時の同僚  
木村清四郎理事に同伴、支那印度及  
び歐米各國を視察せられた。昭和元年  
退職後も、しばらく同銀行事務の屬  
託となられた。銀行在勤の頃、高橋是  
清氏の知遇を得、かつ其の才幹を認  
められた。また床次氏、三郎氏が内務次  
官の頃、君は床次氏より親交の間柄  
であつて、屢々會合互に意見を交換さ  
れたものであつた。また君は數々『ロ  
ンドン・タイムス』に論文を寄稿し  
て大に徳とせられ、隠れた英文學者  
であつたことも一挿話となつて居る

君は如く社會に立派な生涯を贏  
ち獲られたのであつた。而して今や  
亡し矣。吁、悲しい哉。

君は更に良き心算の環境を有して  
居られた。君は明治十九年六月、麻  
布教會に於て小林先露牧師から洗礼  
せられた。君は小林牧師、若先生及  
び上記せる學校の先生等より懇切な  
宗教的指導を受け居られた。君は大  
學に於て知的に進歩せられたことは  
謂ふ迄もないが、君が信仰の基礎は  
此等諸先生に負ふ所が多い。即ち五  
十二年間『クリスチアン・ライフ』  
を讀まれたのも、麻布教會及び英和學  
校の感化に依るものであつた。當時  
君の先生の一なるサンビー氏が其の  
のした著書のうち君の名と其の動靜  
に就て記載されて居るのを讀んだこ  
とがあるがサンビー氏は君を教へ手  
の一人として常に胸裡に往來せしめ  
て居られたやうであつた。

君の性格は清教徒に比したいもの  
があつた。たしかに君は信仰の人で  
あつた。君は先きに良妻を娶はれ、  
其後四女悦子さんをてくされ又一昨  
早卒一拉種の高橋明さんに先き立た  
れて共に人生の苦杯を分けられた。  
それにも拘はらず、患難は繰返を生  
ずで、落つた信仰を思ひて居られた  
「爾曹の憂成は豈な他人のごと  
くならず(帖前四ノ一三)」とは君の  
堅き信仰であつた。

次に君は頭腦明晰にして理智に富  
んだ人であつた。従つて専門の經濟  
問題以外、社會の各方面に亘りて意  
見を有して居られた。意見のあり過  
ぎた位であつた故に他人の意見と衝  
突した場合が無いではなかつた。實  
に君は卒直な人であつた。また君は

日頃世の人々が實力主義を執るに對  
して人格主義を執つて居られた。而  
して君は熱情の人であつた。大正十  
二年の大震災に大破損を來した麻布  
教會の大改築に際し、加奈陀、ワシ  
ョンは復興費數千金を寄與された。  
そこで同教會は速早く陳容を新にし  
た一つであつて翌十三年の秋感謝會  
が舉げられた際、君は幹事長として  
同、ワションに感謝の辭を陳べられ  
たが、感謝會つて盛況共に下るの概  
があつた。

私は明治四十三年の春から君を知  
るに至つた。私が麻布教會在任中、  
君は幹事として教會に奉仕されたこ  
とを思ひ起して感謝を禁じ得ない。  
昭和三年の秋平若先生が阿佐ヶ谷教  
會の特別傳道會を催された際、私も  
一ツ應援に行き、久々に君に對し  
てお目にかかり「先生を中心として君  
も此の地に居るのうちに至り、此  
地は丸でエマソンの棲んでゐた」コ  
ンコードですな」と言ふと君は微笑  
笑を洩らしたことがあつた。また一  
昨年の秋、君の書齋に於て、日頃得  
意の「紅茶哲學」を讀みて欣んだ。  
即ち英國人は紅茶を愛飲する。之を  
愛飲するやうになつてか飲酒の弊害  
を滅するに至つた物語をきかされた  
而して君は毎日一回パン食の主義者  
でもある。私は其の時、ウツク、君  
が老境に達入られ、また信仰も、性  
格もいよく圓熟されつゝあるやう  
に見を受けた。本年四月、一教友と共に  
君を訪ねたが、病床から強いて  
起され我々と二十分ばかり語り  
なれ、我らは聖書を讀み、またいのり  
をなして分かれたが、地上に於ける  
君との最後であつた。

君は曾て平若先生の指導を受け、  
また最近先生の教會に轉じて教養せ  
らる。君が終始仰いだ先生は四十  
年前此の地より歸天された。今や君  
は先生の後を追ふて永遠界に移され  
ます。信仰の佳境に進まるとい  
ます。此の際君の御遺族の上に、天  
父のみが賜ふ恩寵の豊かに加はらん  
ことを祈るのみである。

3つめは、『中央會堂五十年史』である。この中で、多門の親友である当時青山學院の教授であつた櫻井成明は「晩年には英京ロンドンのタイムス社から数次委嘱されて我が国經濟の動向を寄稿したが、タイムス社の如き世界屈指の大新聞社から寄稿を委嘱されることは稀有の事であつたのである」<sup>32)</sup>と書いている。着目すべき

は「委嘱」という言葉である。「委嘱」とは「一定期間、特定の仕事を他の人に任せること」であり、櫻井の記述は、多門がThe Times社に頼まれて一定期間論文を寄稿していたということを示している。さらに文章中には「我が国經濟の動向」という論文内容にも触れた記述があり、多門がThe Timesに寄稿した論文を特定するため

の手掛かりとして貴重な資料である。

4つめは、『阿佐ヶ谷教会の歴史を生きた人々』である。この中に、「多門氏は佐々木高明氏の父上で新聞方面で活躍なさったということです。英文の記事を書かれロンドン・タイムスにも投稿されていたということを大村先生から伺ったことがあります」<sup>33)</sup>という記述がある。ここに記された大村とは、日本基督教団総会議長や東京神学大学理事長を務めた大村勇のことである。これは伝聞ということとその信憑性は前述の3つの資料に比べ低いと考えられるが、The Timesと多門の関係を示す資料が少ない中では貴重なものである。

以上のように、佐々木（2013）の資料を精査した結果、多門はThe Timesに委嘱されて、ある程度の期間に渡り、日本の政治・経済に関する論文を執筆していたとする佐々木の主張はかなりの信頼性があると判断できる。

### 3.3 新しい資料の発見 1－甥・高精の証言

本研究では、多門の生家である青森県日光院の協力を得て保存資料の調査を行った際、多門の甥である佐々木高精の証言を記録した2本のカセットテープの提供を受けた。これらのテープは、1997年（平成9年）11月に高精が経済学博士で独協大学名誉教授であった蝦名賢造の書面による質問に答える形でその回答を録音したものと、1998年（平成10年）5月21日に行われた高精と蝦名との対談を録音したものである。当時、蝦名は平内文化双書の一環として『佐々木多門－経済学とその生涯』の執筆を計画しており、この対談はそのための聞き取り調査として行われた。

これらの記録テープの中で高精は多門に関する貴重な証言を残しており、調査の結果、The Timesに関する証言を新たに発見することができた。日光院ではテープに残されたそれらの証言を既知の情報として重要視していなかったが、多門と深くかかわった高精の証言は、多門研究を進めていく上で極めて重要であると判断し、それらの証言をすべて文字に起こし、その内容を検証することにした。

証言録の検証の前に、多門と高精の関係につ

いて確認する。高精は多門の妹のミキの長男であり、実家である日光院の跡取りだった。高精は1924年（大正13年）3月に上京し、1935年（昭和10年）5月に帰郷するまで、多門の書生として10年以上も一緒に暮らした。この間、多門は高精に対して一男四女の自身の子供たちと同様に接した。高精は多門から受けた恩について、弟への手紙の中で「伯父さんは僕達の第二の親である。否、第一の親であるといってもよいくらいである」（1936年6月30日）<sup>34)</sup>と記している。1934年（昭和9年）、長男の高明が病気で亡くなると、家に残されたのは多門と高精だけになった。当時、多門はすでに老いが進んでいたため、高精は多門のことを本当の親のように世話したという。

以下に証言録の中のThe Timesに関わる部分だけを抜粋する。

#### 「佐々木高精証言録①」より（1997年11月）

- おじさんは日本銀行の現役のときからロンドンタイムスをやっていて、いよいよ定年の60歳が近づいた時、ロンドンタイムスは「貴殿は銀行を辞めるそうだね。定年したら（正式な）通信員になってくれないか」と（要請してきた）。それまでは、（正式な）通信員ではないけども、始終個人で投稿していたらしいのです。その時のロンドンタイムスは実に優秀で、一字一句間違ったものを指摘されれば、それに賞品を出すだけの正確な新聞でした。
- 満州事変に突入してからは、おじさんの家に刑事が張り付くようになりました。何も知らないで玄関の外に出ると、「大将いるか」っていう人がいるんです。それが刑事なんです。日頃からしょっちゅう外国へ手紙を書いたりしているもんだから、警察にマークされていたんです。
- 満州事変に関しては、イギリスやアメリカが寄ってたかって日本を悪者にしました。だからおじさんは、いかにしてあのようになったかということをロンドンタイムスに書いて、政府からとても褒められました。
- おじさんはとても褒められました。日本の満州事変の立場を、何でそうだったかということ



外国の新聞に書いたんです。

- ロンドンタイムスの仕事をする時は、日本銀行のタイピストを使いました。男のタイピストです。タイピストはおじさんの原稿をタイプライターで打ってきて、いよいよそれをロンドンタイムスに送るといときには、慶応大学にケンブリッジ大学を出たイギリスの教授がいたんだが、この人に必ずその原稿をチェックしてもらいました。そのイギリス人教授は、「新しい言葉をどうやって覚えているんだ。この論文は秀逸だ」とびっくりしたそうです。日本には日本の新しい言葉が流行語として出るように、外国にもその時その時の流行りの言葉があるそうです。その新しい言葉をうちのおじさんが駆使していると驚いていたんです。
- ロンドンタイムスの通信員になってくれないかと誘われました。それはもう、まるで名誉なことでした。みんなは、「なにもやらないで、ロンドンタイムスの通信員の仕事ばかりやって、どうするものだろう」って心配しました。そしたらおじさんはね、「これは名誉なんだ。今まではこんなことはないんだ」と言っていました。日本銀行の人もみんな、「これは佐々木さんでなければできない」と言っていました。
- コレスポンデントつつうもんです。東京ロンドンタイムス通信員です。しょっちゅうその仕事にかかりきりになっていました。

#### 「佐々木高精証言録②」より（1998年5月）

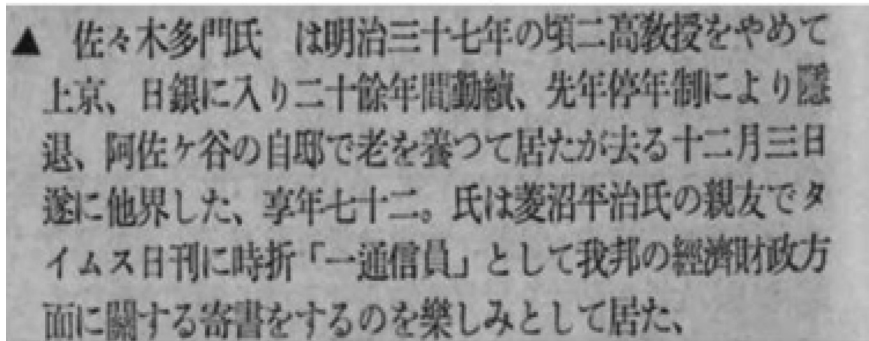
- 阿佐ヶ谷にいたころは、ロンドンタイムス（の特派員）がしょっちゅう家に来ました。また、要人たちとしょっちゅう会っていたために、憲兵が二人も三人も家にいるんです。そして、「大将いるか？」って聞くんです。
- ある時、ロンドンタイムスの車が来て、その時、うちのおじさんが（憲兵らしき男たちを）怒ったことがあるんですよ。

- おじさんは、2年にわたって満州のことをロンドンタイムスに書いているんですよ。
- 玄関を出ていくと、私服が二人立っていて、本当にびっくりするんですよ。笑いながら、「大将いるか？」ってね。そのことをおじさんに言ったら、おじさんは「俺は中にいるから、家に入ってお茶を飲めと伝えろ」と言うんですよ。それでも、絶対に家には入りませんでしたね。

このように、高精はThe Timesに関わる重要な数々の証言を残しているが、この中で最も重要なものは、「コレスポンデントつつうもんです。東京ロンドンタイムス通信員です」と言及している点である。これは高精が多門の業績を語る中で得られた言質だが、この証言は、多門が東京通信員という肩書をもってThe Timesに論文を寄稿していたとする佐々木（2013）を強く裏付けるものであり、貴重な証拠であると考えられる。さらに、本研究では、多門がThe Times通信員であったとするもう1つの証拠を発見した。

#### 3.4 新しい資料の発見2－『英語青年』の記事

3.3では、高精の証言から、多門が「東京ロンドンタイムス通信員」であったという有力な裏付けを得ることができた。さらに今回、国会図書館で文献調査を行った際に新しい資料の発見に至った。それは、1938年（昭和13年）1月15日発行の『英語青年』に掲載されていた。この記事には、「（多門は）The Times日刊に時折「一通信員」として我邦の経済財政方面に関する寄書をするのを楽しみとして居た」<sup>35)</sup>とあった。この記述は、これまで発見されていなかった「多門が通信員である」ことを記した初めてのものであり、高精の証言を裏付けるものである。この記事の発見により、多門がThe Timesの通信員であったことがかなりの確率で言及できるものであると考える。



#### 4 おわりに

本稿の目的は、多門がThe Timesの東京通信員として論文を寄稿していたかどうかということを検証することであった。多門とThe Timesの関係を示す資料が極端に少ない中での新たな資料の発掘は大変困難なものであったが、佐々木(2013)ではあくまでも仮説であった「多門が東京通信員である」という事実を示す2つの新しい資料の発見に至ったことは、本稿の目的達成のために大変貴重なものであった。高精の証言記録と1938年(昭和13年)1月15日発行の『英語青年』の記事は、佐々木(2013)が展開した「多門がThe Timesの東京通信員として論文を投稿した」という主張と整合性があり、本稿の検証に対する十分な証拠になり得ると判断する。

以上のように、本稿は佐々木(2013)の資料の精査と新たな資料の分析をもって、多門がThe Timesの東京通信員(Our Tokyo Correspondent)として論文を寄稿していたと結論付けられるものとする。今後は、本研究をさらに推進し、The Timesに掲載された日本に関する論文の中から多門の記事の特定を図り、その価値を検証したいと考えている。

(2014年12月1日受付、2015年1月15日受理)

#### 謝 辞

本研究は、公益財団法人青森学術文化振興財団からの助成を受け、2014年度青森公立大学地

域研究センタープロジェクトの一環(研究テーマ: 平内町出身の英文筆家佐々木多門をテーマにした英語科リーディング教材の開発に関する研究I)として行われた。ここに関係各位に対し深く感謝の意を表する。

#### 註

- 1) 1本目は甥の高精に宛てた多門の書簡で日付は1937年11月21日となっている。これが多門の絶筆となる。青森県日光院所蔵。2本目が1938年1月14日付の『日本メソジスト時報』に掲載された倉永巍「佐々木多門氏を悼む」という記事である。3本目は阿佐ヶ谷教会史資料委員会(1989)の『阿佐ヶ谷教会の歴史を生きた人々』『佐々木多門』pp.86-87である。4本目は櫻井成明(1940)の『中央會堂五十年史』『中央會堂教會の最古参の舊友たち』pp.235-236である。
- 2) 小林恭子『英国メディア史』(中央公論新社、2011) pp.102。
- 3) 小林恭子『英国メディア史』(中央公論新社、2011) pp.93。
- 4) 磯部佑一郎『イギリス新聞史』(ジャパンタイムズ、1984) pp.88。
- 5) 石井正雄『倫敦タイムス論説集』(研究社、1940) 緒言。
- 6) 石井正雄『倫敦タイムス論説集』(研究社、1940) 緒言。
- 7) 日本銀行調査局有志編纂(1920)『追憶』の中にある水町袈裟六手記部分を参照。
- 8) 日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治

- 大正編』（大蔵省印刷局1958） pp.434。
- 9) 日本銀行調査局有志編纂(1920)『追憶』の中にある水町袈裟六手記部分を参照。
  - 10) “Japanese Economic Progress”, *The Times*, Feb. 18, 1916.
  - 11) 櫻井成明「中央會堂教會の最古参の舊友たち」『中央會堂五十年史』（中央會堂、1940） pp. 235-236。
  - 12) 日本銀行職場百年史編纂委員会「調査花ざかり」『日本銀行職場百年 上巻』（日本銀行、1982） pp.416。
  - 13) 佐々木紀人『佐々木多門伝 世界と戦った風雪の英語人』（東奥日報社、2013） pp.62-64。
  - 14) 日本銀行職場百年史編纂委員会「英語の達人も会話べた」『日本銀行職場百年 上巻』（日本銀行、1982） pp.417。
  - 15) 日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編』（大蔵省印刷局、1958） pp.434。
  - 16) 佐々木紀人『佐々木多門伝 世界と戦った風雪の英語人』（東奥日報社、2013） pp.123-125。
  - 17) 佐々木多門『最近十年間に於ける経済学説』（吉川半七、1901）序を参照。
  - 18) 間宮陽介「佐々木多門氏による二冊の邦訳書をめぐって」（2001）青森県日光院。
  - 19) 倉永巍「佐々木多門氏を悼む」『日本メソジスト時報』、1938年1月14日付。
  - 20) 佐々木紀人『佐々木多門伝 世界と戦った風雪の英語人』（東奥日報社、2013） pp.167-181。
  - 21) 山本四郎「資料紹介 高橋是清日記」『日本歴史493号』（吉川弘文館、1989） pp.86-87。
  - 22) 安藤英男『幻の総理大臣 床次竹二郎の足跡』（學藝書林、1983） pp.153。
  - 23) 外務省情報部『外国に於ける新聞 下巻（支那以外の諸外国之部）』（外務省、1932） pp. 5。
  - 24) 佐々木紀人『佐々木多門伝 世界と戦った風雪の英語人』（東奥日報社、2013） pp.211-212。
  - 25) “THE JAPANESE VIEW / VITAL CLAIMS IN MANCHURIA / A PLEA FOR PATIENCE”, *The Times*, Dec. 1, 1932.
  - 26) アーネスト・R・メイ、掛川トミ子訳「マス・メディアの対日論調」『日米関係史4 開戦に至る十年 マス・メディアと知識人』（東京大学出版、1972） pp.81-128。
  - 27) 2011年1月、佐々木紀人はThe Times本社に対して電話で調査依頼をしている。
  - 28) 佐々木多門が1937年11月21日に甥である高精に宛てた書簡、青森県日光院所蔵。
  - 29) 1998年5月21日に高精が経済学博士で独協大学名誉教授であった蝦名賢造と対談した記録である「佐々木高精証言録①」を参照。
  - 30) 倉永巍「佐々木多門氏を悼む」『日本メソジスト時報』、1938年1月14日付。
  - 31) 「佐々木高精証言録①」を参照。
  - 32) 櫻井成明「中央會堂教會の最古参の舊友たち」『中央會堂五十年史』（中央會堂、1940） pp. 235-236。
  - 33) 阿佐ヶ谷教会史資料委員会「佐々木多門」『阿佐ヶ谷教会の歴史を生きた人々』（日本基督教団阿佐ヶ谷教会、1989） pp.87。
  - 34) 1936年に佐々木高精が弟に宛てた書簡。青森県日光院所蔵。
  - 35) 1938年1月15日付研究社『英語青年』「佐々木多門氏略傳」 pp.34。

#### 引用、参考資料及び文献

- 青森県日光院（1937）『佐々木多門書簡』。
- 青森県日光院（1997）「佐々木高精証言録①」。
- 青森県日光院（1998）「佐々木高精証言録②」。
- 石井正雄（1940）『倫敦タイムス論説集』、研究社。
- 磯部佑一郎（1984）『イギリス新聞史』、ジャパントイムズ。
- 倉永巍（1938）「佐々木多門氏を悼む」、『日本メソジスト時報』、1月14日付。
- 研究社（1938）「佐々木多門氏略傳」、『英語青年』、研究社。
- 小林恭子（2011）『英国メディア史』、中央公論新社。
- 坂口二郎（1931）『ロンドンタイムス史論』、新聞之新聞社。



- 佐々木高精（1936）書簡、青森県日光院所蔵。
- 佐々木多門（1907）『経済学派比較評論』、六盟館。
- 佐々木紀人（2013）『佐々木多門伝 世界と戦った風雪の英語人』、東奥日報社。
- 高橋是清 佐々木多門宛て書簡3通 青森県立郷土館所蔵。
- 中央會堂編（1940）『中央會堂五十年史』。
- 日本基督教団阿佐ヶ谷教会資料委員会（1989）『阿佐ヶ谷教会の歴史を生きた人々』、日本基督教団阿佐ヶ谷教会。
- 日本銀行（1914）*The Recent Economic Development of Japan*。
- 日本銀行調査局編（1958）『日本金融史資料 明治大正編』、大蔵省印刷局。
- 日本銀行調査局有志（1920）「水町袈裟六手記」、『追憶』。
- 細谷千博・斉藤真・今井清一・蠟山道雄（1972）『日米関係史4 開戦に至る十年 マス・メディアと知識人』、東京大学出版。
- 間宮陽介（2001）「佐々木多門氏による二冊の邦訳書をめぐって」、青森県日光院。
- 山本四郎（1989）『日本歴史493号』、吉川弘文館。
- リチャード・イーリー著、佐々木多門訳（1901）『最近十年間に於ける経済学説』、吉川半七。
- The Times（1932）“THE JAPANESE VIEW / VITAL CLAIMS IN MANCHURIA / A PLEA FOR PATIENCE”, Dec. 1, 1932, The Times.